

第2回四国女性研究者フォーラム報告

「若手の活躍促進」～四国のマリー・キュリーを育てよう～

平成 24 年 1 月 27 日 13:30～16:30 愛媛大学南加記念ホール



平成 24 年 1 月 27 日（金）、愛媛大学にて第 2 回 四国女性研究者フォーラム「若手の活躍促進～四国のマリー・キュリーを育てよう」が開催。本フォーラムは、第 1 回を香川大学が企画実施したもので、四国の女性研究者支援の連携と交流をすすめるために行っています。大学・高等教育機関の協力のもと、本年度は愛媛大学が主催となり、四国の国立大学が共催し、継続開催となりました。

○基調講演 「女性研究者の活躍にむけて」 文部科学省高等教育局長 坂東久美子さん

坂東久美子局長は、男女共同参画推進への社会的な要請や女性研究者の置かれている現状、支援の必要性などについてデータに基づき話されました。現代社会は、多様で優秀な人材の参画と活躍が必要であり、アジアにおいても変化のスピードは増してきている。日本では、女性にとってまだまだ仕事と家庭の両立が困難。未婚で働いている人の割合をあげている。かつて、女性が働くと少子化を招くという誤解があったが、1980 年代よりその相関はなくなっている。出生率と女性労働力率の国際比較を見ると、北欧圏、アメリカ、フランスなどが双方とも高くなっており、下位に位置づく日本よりも低い国々を見ると、スペイン、ギリシャ、イタリアとなっており、女性の力を生かし切れていないことが、国全

体の危機につながりかねないと分析する人もいる。仕事か家庭生活の片方を減らすのではなく、自分と時間をうまくコントロールして、相乗効果を出していく「ワーク・ライフ・マネジメント」が求められているとまとめられました。

○特別講演 「世界化学年と女性研究者」 神戸大学特別顧問 相馬芳枝さん

世界女性化学年女性科学省を受賞された相馬芳枝さんが、世界化学年と女性科学省について話されました。講演では、マリー・キュリーの生涯に始まり、現在の世界の女性科学者の活躍について紹介され、若手の女性研究者にエールを送りました。また、ご自身の研究にも触れ、科学の3K「危険・きつい・汚い」をシンプルケミストリーによって、「きれい・かんたん・けいざいの」のNEW3Kに変え、産業の発展に貢献して来られたことを話されました。そして、現在、女性研究者のロールモデルが見えにくく、職位が上がるほど女性割合が低くなること、その状況を変革するために、男女共同参画学協会連絡会を立ち上げに尽力し、現在、加盟学会が70を超えるほどになったこと。そして、連絡会では5年ごとの大規模アンケートに基づき提言を行い、科学技術基本計画に関する要望書が、実際、基本計画の女性研究者の分野別採用目標値に繋がっていったことを報告されました。科学技術の発展には、多様性が必須であり、女性の参加は多様性の指標、活気の漲る日本に繋がっているとまとめられました。

○パネルディスカッション「若手研究者が輝く大学とは」

パネリスト 香川大学 西本佳代 助教
徳島大学 真田純子 助教
鳴門教育大学 梶井一暁 准教授
高知大学 島村智子 准教授
愛媛大学 濱村奈津子 准教授

コーディネーター 愛媛大学 土屋卓久教授

パネルディスカッションでは、教育・学生支援機構 西本佳代先生も登壇され、“若手の活躍できる大学づくり”について、研究の場の確保、結婚や育児・介護の問題、キャリア形成などについて、意見交換がなされました。若手の研究者にとって、大学の安定した職を得ることの困難さ、そして、職を得た後も頑張れば頑張るほど仕事がハードになり大変になること、イクメンという言葉が広まる中で、男性が育児に取り組むために休める雰囲気作りの求められること、若手が着任した後の手厚い支援（研究のスタートダッシュにむけた支援等）の必要性など、なかなか日頃は伝えられない現状を訴えました。海外の研究体験を通して、国際的にみても日本の女性研究者はとても優秀であり、リーダーシップが取れること、サイエンスコミュニケーターとして社会からも期待されていること等が話題に上りました。

最後の質疑応答の中で、若手を育てるためには、「受け入れる大学側の支援や育成の体制づくりが求められる」と愛媛大学の柳澤康信学長からも発言がなされ、大変実りあるフォーラムになりました。

香川大学からは登壇者も含め、本事業に関わる男女共同参画推進室室員と研究協力Gから6名が参加し、来年度の第4回中国四国男女共同参画シンポジウムにむけての情報収集と連携がなされました。